

住職 近況

一休禅師（一三九二〜一四八一）をテーマにした展示会が今秋、十月二十四日から十二月六月まで、東京・世田谷の五島美術館でひらかれました。展示会のテーマは「とんち小僧の正体」。国宝の自画像や墨跡から、現代のアニメ「一休さん」の原画まで、一五〇点もの展示物です。

空前絶後の催しということで、出かけてみましたが、一休さんとは無関係の美術館所蔵の愛染明王の仏像が気にかかりました。重要文化財です。

説明書によれば、その仏像は明治時代のはじめまで、鎌倉の鶴岡八幡宮にあって、八幡宮はもとは八幡宮寺という名称のお寺だったということです。

美術館内は撮影禁止です。壁に紙をおしつけてボールペンでその説明書きを写しはじめました。ボールペンの筆圧で壁が傷つくことを恐れたのでしょうか。学芸員の女性が鉛筆を持ってきてくれました。その鉛筆で要点だけをメモし終わった頃、その女性が教えてくれました。

「その仏像の詳しい説明だったら、売店で売っている目録にありますけど」

早く言ってよ。ブスっとして、売店で一休展の図録といっしょにその目録も買い求めたのです。

一休展が目的だったのに、とんだ道草をしました。でも、寄り道して一杯、というあの気分で心地良い瞬間でした。

少しまえから、神仏習合が気になっていました。習の字には重なるという意味があります。明治時代の初めまで、仏教と神道は重なり合っていたのです。鎌倉が特別なのではなくて京都の北野天満宮にも大きな僧坊があり、一切経というお経が収められていました。その切れ端が松岩寺にもありますし、毎朝、天神さんやお稲荷さんにもお経をあげています。

百五十年前までは、お寺も神社も今とは違う姿だったのでしょうか。だから、大晦日に寺で除夜の鐘をついて、正月に神社で初詣をするのも自然な姿なのかもしれません。